

灰色の父

菅原 敏 造

てゐたあの頃の私にも、この二人の幼稚園の先生には、思はず頭が下がりました。

□

若き父と云ふ名前で、ちよい／＼つまらない事を書いたのは、この雑誌がまだ「婦人と子ども」と云つてゐた時、かれこれ十七八年も前のことでしたが、その時の若い父も、今では胡麻鹽頭の親爺になつてしまひました。昨年の春で四番目の末子の幼稚園生活も終りましたが、久しぶりて灰色の父と云ふのを、少し書かせて頂きましやうか。

若き父の胸に觸れたあの時代の幼稚園の空氣には、聖母のやうな安井先生と、教母のやうな池田先生の姿が、二つの明星のやうに靜かに輝いて居りました。法（ほう）も識（し）らず掟（おきて）も思はずただ動き行く己の姿を眺める——と云ふやうなことを粗雑にやつ

はじめて子供をもつた翌年のある暑中休暇の日に、子供とくらしした數日の生活を、その子供の名づけ親の倉橋君へ手紙にして出したことがありました。その時「婦人と子ども」の編輯をしてゐた倉橋君の記者心理から、思ひがけず、その手紙がこの雑誌の前身に載ることに成つたのです。若き父と云ふ名の名づけ親もやはり倉橋君でした。これが皮切りで、すつかり若き父になりました、ついでに氣になつて、四五度ばかりつまらないことを書いて見たのです。

一體、後を顧みる趣味を割合に持ち合せない私
が、柄にもない十七八年前のことを繰り返すやう
になつたのには譯があります。幼稚園のいろ／＼
なものが大震災災で無くなつたので、この雑誌も
初號からちやんととり揃へてあつたのを、神田先
生が幼稚園に寄贈して下さいました。それを今の
幼稚園の若い先生方が、面白半分にくり返して見
て、「やあこんな事が書いてある、また何か書いて
もらはう……」と、これです。

□

十七八年前の本誌で御馴染みになつたその子供
が、運よく六歳の春に幼稚園に入りました。これ
がなか／＼氣むづかしい・育てにくい・面倒な子で
先づ入園の日に式場で大聲をあげて泣き出して主
事の安井先生を驚かしたのを手始めに、絶えず池
田先生の手あつた御世話や倉橋君の後見を頂いて
居りました。

その後の三人の子供は、皆すらく／＼と樂に行く
のに、どうしてこの最初の子供があんなに育てに
くかつたのか、死んだ子の齡を數へると今で二十
歳にもなるのですが、母親は時々それを思つて、
今でも涙を拭ふことがあります。何と云つても兩
親が若かつたものですから、親らしくもなく、子
供を向ふに廻はして、むきになつて掛つたのもあ
るでせうが、昔の流義に従へば輪廻とか血とか云
ふことかも知れませんが、自己流の言葉で云へば、
等質から異質を分化して置きながら、しかもその
異質を認めたくない悲劇の豫感とても云ふのでせ
うか。

しかも、その悲劇の豫感が、両親に深刻な惱み
を與へ切らないうちに、捨身の尊さを知らしめな
いうちに、この問題の子供は十一歳で急に死んで
しまつたのです。昔からよく掌中の珠を奪はれる
と申しますが、私達の心持から云へば、土を變じ

て黄金としようとする錬金術師の手から、突然にそのたつた一塊の大切なる土を奪はれてしまつたのです。珠を奪はれた位の單純な一と筋の悲みてはありませぬ。

□

この頃は、お茶の水の幼稚園と大塚の小學校との連絡のあつた時代でしたから、お蔭ですら〜と赤ふさの三角帽をかむることが出来ました。

何でも小學校へ入つてから四日目か五日目のことでした。私がついて小學校へ送つて行く途中、電車の扉で小さい手を挿まれた時、家てこんなことがあつたら、それこそ大變な騒ぎをする所なのに、ペンをかきながらも、泣かずに堪へ通したのを見て、私は、どんなに心の中で泣かされて、どんなに心の底で強められ勵まされたこととせう。その時、そんな氣持を「心理研究」に何か書いて見ましたが、これがこの子供についての私の記事の

おしまひてした。

輪廻か、血か、異質か、土か、それとも、輪廻の克服か、血の淨化か、等質への環元か、土の光りか、要するにその歸結は、これから伸びて行く三人の子供の姿と、私共の苦行の跡で知れることとせう。

